

烏弋山離とアレクサンドリア(3)

—「弋」と「離」の音価—

吉池孝一 中村雅之

弋と離について

中村：前は「烏」が「Alexandria」の語頭の/a/に相当することについて検討しました。今回は「烏弋山離」の「弋」が「Alexandria」の/lek/に相当し、「離」が「Alexandria」の/reia/に相当することについて議論しましょう。

吉池：参考までに、Karlgren(1957)<sup>1</sup>によって、弋と離の上古音と中古音を見ておきます。

|         |     |       |     |      |
|---------|-----|-------|-----|------|
| 弋(喻母四等) | 上古音 | *djak | 中古音 | jak  |
| 離(来母)   | 上古音 | *lia  | 中古音 | ljie |

中村：カールグレン氏は、「大」や「道」など(中古音でいう“定母”)の字を、気音を伴う\*d'-[d<sup>h</sup>-]で表記します。この[d<sup>h</sup>-]は後代の中古音でも有気の[d<sup>h</sup>-]のままとします。それとは別に「弋」や「由」など(中古音でいう“喻母四等”)の字を、気音を伴わない[d-]とし、こちらは中古音では消失します。上古音において有気の[d<sup>h</sup>-]と無気の[d-]を区別し、「弋」のほうに無気の[d-]を想定するというわけです。

吉池：「大」や「道」は日本漢字音でもダイやドウであるし、現代北京方言でも[ta]や[tau]なので、声の有無以外に上古音や中古音と現代音に大きな違いはありません。一方の「弋」や「由」のほうは、日本漢字音でヨクやユウであるし、現代北京語でも[i]や[iəu]であり破裂音[d-]であった痕跡は見えません。どうして[d-]のような音を想定したのでしょうか。

中村：主には漢字の声符によります。声符を同じくする漢字(諧声系列をなす漢字)は、漢字が作られた当時似通った音を持っていたに違いないと考えたわけです。例えば弋を声符とした漢字には「弋、杙、代、岱、式」があります。これらの上古音と中古音をカールグレン(1957)で示すと次のようになります。

|   | 上古音   | 中古音  |
|---|-------|------|
| 弋 | *djak | jak  |
| 杙 | *djak | jak  |
| 式 | *sjak | sjak |

<sup>1</sup> Karlgren, B. (1957), *Grammata Serica Recensa*. Stockholm: The Museum of Far Eastern Antiquities. 1987年のリプリント版による。

|   |       |      |
|---|-------|------|
| 代 | *d'æg | d'âi |
| 岱 | *d'æg | d'âi |

吉池：弋 (jæk) と同じ声符を持つものとして代 (d'âi) や岱 (d'âi) がありますね。  
式\*sjæk は、弋\*djæk と同じ声符を持つにもかかわらず、全く異なる子音\*s とするのはどうい  
うことでしょうか。

中村：その点については、カールグレン氏以後の研究を見てみましょう。藤堂明保(1978)<sup>2</sup>に  
よると次のようにあります。

|   | 上古音  | 中古音  |
|---|------|------|
| 弋 | ɟiæk | yiæk |
| 杙 | ɟiæk | yiæk |
| 式 | θiæk | ʃiæk |
| 代 | dæg  | dæi  |
| 岱 | dæg  | dæi  |

吉池：藤堂氏は「式」を、[d-] に類似した無声有気の破裂音 [t<sup>h</sup>-] としていますね。とこ  
ろで、カールグレン氏は喻母四等を無気 of \*d- [d-] とし定母を有気 of \*d' [d<sup>h</sup>-] とし両者  
を区別しますが、藤堂氏は喻母四等を、○を付した [ɟ-] とし、定母を [d-] とすることに  
より両者を区別しています。○を付した [ɟ-] はどういう音質でしょうか。

中村：まず、喻母四等に対して定母に近い声母を設定するという点においては、カ氏も藤  
堂氏も変わりありません。カ氏は中古音の濁音声母を有声有気と結論づけた関係で、上  
古音でも必然的に定母などを有声有気にしています。その定母と諧声系列をなす喻母四等  
を、定母に似て非なるものということで有声無気とした訳です。もしも、カ氏の有気の定  
母\*d' [d<sup>h</sup>-] を硬音 (fortis)、無気の喻母四等\*d- [d-] を軟音 (lenis) とみてよいならば、  
後者の軟音 of \*d- [d-] の方がどちらかということと変化し消失しやすいと言えます<sup>3</sup>。藤堂氏の

<sup>2</sup> 藤堂明保 (1978) 『学研漢和大字典』 学習研究社。

<sup>3</sup> 硬音 (fortis) は調音時に調音器官の強い緊張を伴う子音、軟音 (lenis) は緊張の弱い音  
と説明されることが多いが、緊張の度合いを客観的に測るのは難しく従来の説明ではこの  
用語を利用しにくい。ここでは次のように解釈することにする。“硬音とは調音時に一定の  
緊張を伴うために、その音価が一定でほとんどブレがないもの。それに対して軟音は緊張  
が弱いために、環境に応じて異音が生じやすく、発話者によっても音価に幅があるもの。”  
例を挙げれば、モンゴル語や満洲語の破裂音・破擦音の 2 項対立は研究者によって「無声  
と有声」としたり「有気と無気」としたりする。これは一方が硬音の「無声有気」である  
のに対して、もう一方が軟音で「無声無気～有声無気」と揺れがあることによる。音価に  
揺れがあることが軟音とみなすべき特徴である。同様に朝鮮語では激音と濃音が硬音であ  
り、有声～無声で揺れのある平音が軟音ということになる。上海語では無声無気と無声有

○を付した [d̥-] は閉鎖の弱い破裂音を示すとのことですので<sup>4</sup>、こちらは明らかに通常の [d] よりも変化し消失しやすいということになります。喻母四等の破裂音は後に摩擦音となり、隋唐代の中古音で消失することを考えれば、閉鎖の弱い [d̥-] という説明は妙案であるかもしれません。ただし、通常の [d] と閉鎖の弱い [d̥-] を声母の体系の中でどのように整理するかは難しいところです。

吉池：声母の体系の中でどのように整理するか難しいということについて、カールグレン氏と藤堂氏の実例を見てみましょう。中古音の定母 ([d<sup>h</sup>] ないし [d]) の諸字と諧声符を同じくし、定母と極めて近い関係にあるとされるものに、澄母、船母、禪母、喻母があるわけですが、この四つの声母を、上古音でどのような区別を設定しているか、カールグレン氏と藤堂氏について実例によって確認すると次のようです。

|        | カ氏     |         | 藤堂氏   |       |
|--------|--------|---------|-------|-------|
|        | 上古音    | 中古音     | 上古音   | 中古音   |
| 重 (澄母) | *d'juŋ | ǰ'iwong | druŋ  | ɟruŋ  |
| 繩 (船母) | *ǰ'iəŋ | ɟz'iəŋ  | diəŋ  | ɟziəŋ |
| 常 (禪母) | *ǰiang | z'iang  | dhiaŋ | ʒiaŋ  |
| 弋 (喻母) | *d̥iəŋ | iəŋ     | ɟiək  | yiək  |

中村：これを見ると、カールグレン氏は中古音で破裂成分が消失したものについては上古音で\*d̥- [d̥-]、\*d- [d-] を設定し、中古音で破裂成分が残ったものは上古音で有気音の\*d<sup>h</sup>- [d<sup>h</sup>-]、\*ǰ' [d̥<sup>h</sup>-] を設定することによって、中古音の区別を上古音の声母の区別に投影させているようです。藤堂氏は、中古音の区別を上古音の声母や介音の広狭 (-r-と-i-) によって重複することなく区別しますが、中古音で認めない有声の破裂音・摩擦音における息の有無の対立を上古音では認めています。また、[d̥-] と [d̥-] など中古音に無い閉鎖の強弱の対立を上古音に認めています。藤堂氏の上古音の場合、[d̥<sup>h</sup>-] や [d̥-] を、声母の体系の中でどのように整理するか、やはり難しいですね。

吉池：いずれにしても、藤堂氏をはじめその後の研究では諧声系列を成す漢字には類似し

---

気が硬音であり、有声音が（語頭で半ば無声化することから）軟音と解釈できる。カールグレンの体系では、定母が安定して中古音まで有声有気\*d<sup>h</sup>- なのに対して、喻母四等は上古の有声無気\*d̥- から中古のゼロ声母へと弱化・消失してゆく。

<sup>4</sup> 藤堂明保(1967)「上古漢語の音韻」『中国文化叢書 1 言語』大修館書店。「喻母字は、必ず4等拗音にのみ出現するから、その介音イは、弱 i ではなくて強く狭い i であつたろう。それにしても、私どもはすでに、\*d+i→ɟɿ (神母) \*dh+i→ʒɿ (禪母) という公式を設定したから (72 ページ)、喻母の源流としては\*d̥や\*d<sup>h</sup>以外のもの、つまり特に閉鎖の弱い弱 d̥ を考えなくてはなるまい。」(74 頁)。藤堂明保(1978)は「そこで、原則としては、中古の喻母の原形として、d 類 (とくに破裂の弱い d̥) をもってくるのがよい。」(1599 頁) とある。若干表現を異にするが同趣旨の言及である。

た音を設定するようです。

「Alexandria」の/lek/を「弋」([d̪iək] もしくは [d̪iək]) で音訳しえるか

中村：弋の字音が、無気の [d̪iək] もしくは閉鎖の弱い [d̪-] の [d̪iək] であったとして、「Alexandria」の/lek/の音訳に適しているかどうか、次の問題です。漢代の来母が [l-] であったとするならば、何らかの来母字を使用した方が音は近いということになります。[l-] ではなくなぜわざわざ [d̪-] もしくは [d̪-] を利用したのか説明が求められます。

吉池：その点について、第一回目でとりあげた白鳥庫吉(1917)「罽賓國考」<sup>5</sup>に次のようにあります。

此の如く太古より有名なる Arachosia が、漢代の支那人に Alexandria の名によりて傳はれりとせば、そは甚だ不思議の事にあらずや。また更に之を考ふるに、當時漢人が實際彼の國に至りて Alexandria の名を聞き傳へたらんには、必ず之を阿歴山離とも記すべき筈なり。何となれば l 音は元來漢人の有する發音なればなり。然るに何が故に之を烏弋山離と書き綴りしか、甚だ奇怪の事と謂はざるべからず。想ふに烏弋山離の烏弋は Harauvatiš の Harau, Arachosia の Arach を譯したるものなるべし。漢語には r 音なかりしが故に、rau, rach を音譯するに類似の發音を有する弋 (yok, dok) 字を使用せしならん。また烏弋山離の山離は Drangiana をいへるなるべし。

白鳥庫吉(1917)は、「烏弋山離」が「Alexandria」の音訳ではない論拠の一つとして「弋」の字音をあげます。/lek/の音訳であるならば「歴」を使用するはずで、弋 (yok, dok) を使用したのは「Arachosia」の「rach」の音訳のためであるとしています。この議論の適否についてはともかくとして、/lek/の音訳に最適と思われる来母字の歴(カ氏は上古音 \*liek、中古音 liek とする)を使用せず、喻母四等字の弋を使用したのはなぜか、という指摘です。

中村：歴(カ氏 \*liek、liek)があるならば、わざわざ弋(カ氏 \*d̪iək、藤堂氏 d̪iək)を使う必要はないという指摘は的を射たものです。ところで、その議論に入る前に気になる点があります。

吉池：どういうことでしょうか。

中村：白鳥庫吉(1917)は、弋の字音を yok と dok とするわけですが、諧声系列の結果と同じ音形となる dok は、どのような情報によるものでしょう。

---

<sup>5</sup> 『白鳥庫吉全集 第六卷』(岩波書店, 1970年)所収による。

吉池：その点については白鳥庫吉(1924)「粟特國考」<sup>6</sup>に次のようにあります。

粟特二字【『魏書』と『周書』の語形：吉池注】の古音は *suk-dök*, *suk-dêk* と思はれるから、これで *Sughduk*, *Sughdak* の名を表はしたのに少しの無理はないが、『後漢書』と『晉書』との粟弋は通常 *suk-yok* と響いたものと信ぜられてゐるから、これで *Sughduk* を譯したとすれば、聊か故障のあるやうにも考へられないでもない。然し弋字は安南語で *dok* であるから、粟特【粟弋のミスプリであろう：吉池注】二字の古音は *Suk-dök* で粟特と全く同音だとすれば、此等の困難は忽ち除去されるわけである。唐代の碩學杜佑も亦同様の意見を懐いてゐたから、『通典』卷一九三に「粟弋後魏通焉、在葱嶺、大國、一名粟特」と書いてゐる。(66頁)

中村：安南（ベトナム）漢字音で弋が *dok* とあることを根拠としたようですね。所謂クオック・ゲーによる弋の字音の表記を三根谷徹(1993)<sup>7</sup>によってみると「*đưc*」とあります。問題の文字「*d*」の実際の音ですが、同書によると次のようにあります。

ベトナム語の *d* は今日北のハノイ方言では [*z*] となつてゐるが、中部・南部方言の多くは [*j*] と發音されている。17世紀にこの字母が選ばれたのは當時の音が [*d*] に近い音だつたからであり、今日の中部方言に [*ɗ*] という發音が聞かれる。ムオン語諸方言では *y* (*Thạch-bì*), *t* (*Uý-lô*, *Hạ-Sừu*, *Thái-thịnh*), *t* 又は *y* (*Lâm-la*), *t* 又は *z* (*Mĩ-son*), 等々というような對應を示している (MPA 69)。更に MPA は 15 世紀の『華夷譯語』によつて 15 世紀にはまだ *j*→*ɗ* の變化が起つていなかったとして、その變化を 15 世紀から 17 世紀の間に起つた現象とした。

そこで、AC の *j* は、

AC-*j*- .....SV-*j*-[AB] → *ɗ*-[AB] (*d*) → *z*-[AB] (*d*)

と假定される。(317頁) 【MPA は Maspero, H. (1912) *Études sur la phoétique historique de la langue annamite. Les initials. BEFEO* XII. AC は Ancient Chinese. SV は Sino-Vietnamese. [AB] はベトナム語の声調 (A は 1 高平, 3 高降昇, 5 高昇の群。B は 2 低平, 4 低降昇, 6 低降の群)】

この記述によると、弋の声母が [*d*-] に近い音となるのはベトナム語内部の音変化によるもので、弋のベトナム漢字音を [*dok*] とするのは適當ではないということになります。偶然に諧声系列の結果とベトナム漢字音のラテン文字表記が一致したわけです。

吉池：なるほど。ベトナム漢字音はともかくとして、問題の弋がソグド (*Sughduk*) の *duk* の表記に使用されており、諧声系列から想定した弋の上古音 *\*ɗiak* もしくは *ɗiak* と類似した

<sup>6</sup> 『白鳥庫吉全集 第七卷』(岩波書店, 1971年)による。

<sup>7</sup> 『中古漢語と越南漢字音』(汲古書院, 1993年)による。第II部は『越南漢字音の研究』(東洋文庫論叢第53, 1972年)。

音が漢代にもあったということになりますね。

### ソグディアナと粟特国

中村：ところで、白鳥庫吉(1924)に「これで Sughduk, Sughdak の名を表はした」とありますが、Sughduk と Sughdak は何によるものでしょう。

吉池：Sughduk や Sughdak が出てくる古資料について特段の言及はありません。あるいはこれは実在した語形ではなく、ソグディアナを指す「粟特」の古音 suk-dök や suk-dêk から想定した語形かもしれません。

中村：実在した語形として、白鳥氏はどのようなものをあげていますか。

吉池：白鳥庫吉(1924)に次のようにあります。

又その【『Avesta 経』を指す：吉池】Sughdha は Behistun の銘文に Suguda、Persepolis の銘文に Suguda、Naksh-i-Rostam の銘文に Suguda とあり、Herodotus の『歴史』に Soghdo とあるのと同名で、其の地は一體に於いて今の Boxāra 汗國に當る。(45 頁)

ソグディアナに相当する語形について、アヴェスタはともかくとして、アケメネス朝のダレイオス王(在位前 522-前 486 年)の 3 つの碑文は Suguda とし、ヘロドトス(前 5 世紀)の『歴史』は Soghdo とするとのことです。

中村：なるほど。漢代とほぼ同時代を生きたストラボン(生年前 64 年頃)の『地誌』はいかがでしょう。ソグディアナは出てきますか。

吉池：第 11 巻第 11 章の「二 バクトラ市の領域」に次のようにあります。

ギリシア人たちはソグディアネ地方をも領していたが、この地方はバクトリアネ地方より東にあたってそれより上の方になり、オクソス【アム・ダリア：吉池】、イアクサルテス【シル・ダリア：吉池】両川の間位置する。前者の川がバクトリア、ソグディアノイ両族間の地方境となり、後者がソグディアノイ族と遊牧民の境川となっている。(71 頁)

中村：アム・ダリア川の北側が「ソグディアネ地方」で、南側が「バクトリアネ地方」ということですね。このソグディアネ地方に当たる国を『後漢書』と『晋書』は粟弋(そくよく)国と音訳した<sup>8</sup>。

---

<sup>8</sup> 粟の漢字音は『学研漢和大事典』や『角川新字源』によると慣用音ゾク、呉音ソク、漢音シヨクとある。『全訳漢辞海』(三省堂)によると呉音ゾク、漢音シヨクとある。後者が前者と異なるのは「江戸期以後の推定や演繹による読みを退け、鎌倉・室町以前の古辞書な

吉池：音訳の表記は史書により変遷があるので確認をしておきます。

・『後漢書』（後漢 25-220 について書かれた歴史書。南朝宋代の範曄 398-445 の編纂）巻 118 西域伝第 78 は粟弋（りつよく）とします。

粟弋國屬康居。出名馬牛羊蒲萄衆果。其土水美。故蒲萄酒特有名焉。

・『晋書』（西晋 265-316 と東晋 317-420 について書かれた歴史書。唐代に編纂）巻 97 西戎伝は粟弋（そくよく）とします。

康居國在大宛西北可二千里。與粟弋、伊列隣接。

・『魏書』（北魏 386-534 について書かれた歴史書。6 世紀中頃に編纂）巻 102 西域伝は粟特（そくどく）<sup>9</sup>とします。

粟特國在葱嶺之西。古之奄蔡。

・『周書』（西魏 535-557 と北周 557-581 について書かれた歴史書。唐代に編纂）巻 50 下異域伝は粟特（そくどく）とします。

粟特國在葱嶺之西。蓋古之奄蔡。

中村：『後漢書』の粟弋（りつよく）は粟弋（そくよく）の誤写でしょうね。

吉池：白鳥庫吉(1924)も、杜氏の『通典』をあげて誤写とします。

『後漢書』の粟弋は此處【吉池：『晋書』】の粟弋と同名で何れかに誤寫があると思はれるが、杜氏の『通典』巻一九三に

粟弋後魏通焉。（中略）一名粟特。

とあつて、粟弋と粟特とを同名と見てゐるから、『後漢書』の粟弋は粟弋の誤寫に相違ない。（64 頁）

中村：粟弋はソグドの音訳で、粟弋は後に粟特と表記されたとして大過はないようですが、粟弋もしくは粟弋について他の解釈はありませんか。

吉池：陳世明・呉福環(2003)は、『後漢書』の「粟弋」を、中期ペルシア語によるソグドの呼称 Sūlikar の音訳とします<sup>10</sup>。

---

どののこる字音資料にもとづくことにした。それによって、これまで慣用音とされてきたものの多くが、正当な漢音・呉音として位置づけられた。」という編集方針によるものであろう。ここでは原音に近くするため、従来の字典の呉音にしたがい“そく”とする。

<sup>9</sup> 歴史学においては「ぞくとく」と読まれるが、原音に近くするために呉音により「そくどく」と読む。

<sup>10</sup> 陳世明・呉福環(2003)『二十四史兩漢時期西域史料校注』新疆大學出版社。「粟弋，即粟特。粟弋爲中古波斯後對粟特的稱呼 Sūlikar 音譯，“粟特”應譯自粟特人的自稱 Sogd，隋唐亦稱之爲“昭武九姓”，均系中亞古國。」（614 頁の注④）。

中村：粟を粟の誤写として Sü にあててを likar に当てると考えるのでしょうか。を likar に当てるとしたら、「Alexandreia」の/lek/にを当てると同じになりますね。

吉池：興味深い説ではあるのですが、中期ペルシア語 Sülikar の出所が不明なので、ここで検討するのは難しいですね。今後の課題ということにしましょう。

中村：そのほかはいかがでしょう。

吉池：最近のことですが「海格里斯的博客」というブログで「粟弋、粟戈和乌弋山离——兼论番汉对音要注意的问题(2008-12-27 16:29:58)」という文章を見かけました。どうも「東方語言学網」からの転載であるらしいのですがよくわかりません。なかなか興味深い内容です。それによると、粟弋は粟戈の誤写とします。上古音の枠組みでいうと戈の声母は見母、韻部は歌部です。この音を用いて sogd の gd に当てたとします<sup>11</sup>。

中村：戈の声母 [k-] で sogd の g に当て、戈の韻尾に何らかの子音を想定して sogd の d に当てるという考えですね。興味深い案ではあるのですが、戈はやや唐突な感じをうけます。弋で説明ができない場合にを誤写として排し、その後で戈を検討するべきではないでしょうか。最初からを誤写として戈を検討するというのはいかなるものなのでしょう。

### 粟弋と屬繇

吉池：ところで、白鳥庫吉(1924)は『魏志』巻30に引用する『魏略』「流沙西有大夏國、堅沙國、屬繇國、月氏國四國。」にある「屬繇國」をソグドの音訳とします。岑仲勉(1981)『漢書西域傳地理校釋』（中華書局）も屬繇をソグドの音訳とする白鳥氏の説に賛同しているので歴史学の立場からみて大過はないのでしょう<sup>12</sup>。白鳥庫吉(1924)には次のようにあります。

屬繇二字の古音は Suk-yo であるが、繇の安南音が do, dăc であり [Nam-hoa Tu-Dien, Soan-gia, 1940, p.212, 88]、また粟弋 (Suk-yok) の弋が dok と音じた例から察すると、屬繇は三國時代に Šuk-do と音じたか、さなくも之と類似の發音を有したものと見て差支はなからう。屬繇が已に Šuk-do と音じたとすれば、それが Zarafšan 河の流域をいふ Sughduk, Sughdo の對音と見做すことができ、従つて此の名が三國時代にも漢人に知られてゐたのが推されるわけである。(68頁)

---

<sup>11</sup> 「粟弋實際上也可以和粟特很好對應，不過有點曲折。粟特人的自稱爲 sogd (或者 soghd)，粟古音\*sog，而“戈”見母歌部，按王力先生的意見，歌部和月部很好的對轉，也就是說戈對應於後面的音節 gd。也就是說，“粟戈”能恰好的翻譯了粟特人的自稱，這是相當有利的證據」

<sup>12</sup> 同書 276 頁參照。



中村：ベトナム漢字音の表記は先にみた弋の表記と同様に誤解に基づくものですが、喻母四等の弋が漢代に [d-] に類する音を持っていたように、同じく喻母四等の繇が [d-] に類する音を持っていたとしても不思議ではありません。いま、カールグレン (1957) の *Grammata Serica Recensa* によって、屬と繇の上古音と中古音を確認すると次のようになります。

|          |                    |                   |
|----------|--------------------|-------------------|
| 屬 (禪母)   | 上古音 * <i>d̪iuk</i> | 中古音 <i>z̪iwok</i> |
| 繇 (喻母四等) | 上古音 * <i>d̪iog</i> | 中古音 <i>j̪äu</i>   |

屬の上古音は口蓋化した有声破裂音の *d̪* としますが、漢代以降は摩擦音となって、白鳥氏によるソグドの語形「Sughdo」の「Sugh」に対応し、繇 (喻母四等) は有声の破裂音を保っており「Sughdo」の「do」に対応するとみて大過はないでしょう。

吉池：ここでも弋や繇などの喻母四等がソグド「Sughdo」などの「d」、即ち [d-] 類の音に対応することが確認されたこととなります。これまでのところをまとめると、おおむね次のようなことでしょうか。

- ① 「ソグド」の原音は *suguda* や *soghdo*、*sogd* に類するものであるらしい。
- ② 漢字音訳は「栗弋」「屬繇」「栗特」である。
- ③ 喻母四等の「弋」「繇」は、漢代に [d-] に相当する音を持っていたが、後に声母が弱化・消失したために、新たに「特」で [d-] を表すことになった。

このように考えると、「弋」の漢代音をカールグレン氏の上古音 \**d̪iak* に類したのものとして大きな矛盾はないようです。そうであるならば、「Alexandria」の /lek/ の音訳になぜ来母字ではなく \**d̪iak* に類した弋を使用したのかということが問題になります。

### 現代漢語方言中の閩語

中村：そうですね。「Alexandria」の /lek/ の音訳の候補として歴 (カ氏 \**liek*、*liek*) があるならば、弋 (カ氏 \**d̪iak*、藤堂氏 *d̪iak*) を使用する必要はない。それなのになぜ弋を使用したのか、説明しなければなりません。

吉池：弋を使わざるをえない理由があったということですね。

中村：漢代の弋の字音が、ソグドの音訳語「栗弋」からみて、カ氏 \**d̪iak*、藤堂氏 *d̪iak* と大きく離れることはないとする議論が正しいとするならば、来母の歴の字音の方が問題となりますね。

吉池：喻母四等字と来母字について、まずは検討の出発点となる現代方言音を確認しましょう。『漢語方音字彙 (第二版)』により概略をみることにします。同書に喻母四等の「弋」字は出ていませんので、同音の「翼」によることにします。

- ・ 喻母四等「翼」

北京 [i]、濟南 [i]、西安 [i]、太原 [i]、武漢 [i]、成都 [i]、合肥 [iəʔ]、揚州 [i]・[ieʔ]  
 旧、蘇州 [jiiʔ]、温州 [jiai]、長沙 [i] 文・[ie] 白、双峰 [e] 文・[ia] 白、南昌 [it]、梅県 [it]、  
 広州 [jik]、陽江 [jrk]、厦門 [ik] 文・[sit] 白、潮州 [ek] 文・[sik] 白、福州 [iʔ] 文・[siʔ]  
 白、建甌 [i] 文・[sie] 白

・来母「歴」

北京 [li]、濟南 [li]、西安 [li]、太原 [lieʔ]、武漢 [ni]、成都 [ni] 文・[nie] 白、合肥  
 [liəʔ]、揚州 [lieʔ] 旧、蘇州 [liiʔ]、温州 [lei]、長沙 [li]、双峰 [li]、南昌 [lit]、梅県 [lit]、  
 広州 [lik]、陽江 [ljk]、厦門 [lik]、潮州 [leʔ]、福州 [liʔ]、建甌 [li]

中村：喩母四等では広州の [jik]、潮州の [ek] が /lek/ に近いですが、 /l-/ に相当するものは  
 ありませんね。ところで、閩語に属する厦門 [sit] 白、潮州 [sik] 白、福州 [siʔ] 白、建甌  
 [sie] 白の [s-] は、中古音との対応からみて想定されにくい音となっていますが。

吉池：『漢語方音字彙（第二版）』のみに拠って感想を述べる程度なのですが、[s-] や [ts-]  
 や [z-] などの舌尖の摩擦音や破擦音が、中古音との対応からみて想定されにくいところに  
 現れる場合には二つのケースがあるようです。それは閩語の喩母四等と来母です。

中村：それではあらためて閩語で喩母四等と来母の字音がどのようになっているか確認し  
 てみませんか。

## 閩語の喩母四等

吉池：まず閩語の喩母四等をみると次のようです。

- ・「葉」は、建甌 [tsia]・[nio] 俗（俗はクマザサの葉の訓詁との注記あり）
- ・「液」は、厦門 [ik] 文・[sioʔ] 白、潮州 [ek] 文・[sieʔ] 白、福州 [iʔ] 文・[suəʔ] 白
- ・「悦」は、潮州 [zuek]
- ・「遺<sub>遺失</sub>」は、潮州 [zui]
- ・「翼」は、厦門 [ik] 文・[sit] 白、潮州 [ek] 文・[sik] 白、福州 [iʔ] 文・[siʔ] 白、建甌  
 [i] 文・[sie] 白
- ・「榆」は、潮州 [zu]
- ・「愉」は、潮州 [zu]
- ・「裕」は、潮州 [zu]
- ・「喩」は、潮州 [zu]
- ・「維」は、潮州 [zui]
- ・「唯」は、潮州 [zui]
- ・「耀」は、厦門 [iau] 文・[ts'io] 白
- ・「鹽」は、厦門 [iam] 文・[sī] 白、福州 [sien]

- ・「檐」は、厦門 [iam] 文・[tsĩ] 白、潮州 [siəm] 文・[tsĩ] 白、福州 [sien]、建甌 [saŋ]
- ・「允」は、潮州 [zuŋ]
- ・「痒」は、厦門 [iəŋ] 文・[tsĩũ] 白、潮州 [iaŋ] 文・[tsĩē] 白、福州 [yəŋ] 文・[suəŋ] 白、  
建甌 [iəŋ] 文・[tsiəŋ] 白
- ・「蠅」は、厦門 [iŋ] 文・[sin] 白、潮州 [siŋ]、福州 [siŋ]、建甌 [saiŋ]

中村：“文”と注記のある文語音と、“白”と注記のある白話音（口語音）の二種がある場合、[s-] や [ts-] は白話音（口語音）に現れるようです。全体に何らかの規則性があるようには見えませんが、潮州で文白異読（文語音と口語音で文字の読み方が異なること）がないばあい、ほとんどが有声の [z-] となってあらわれます。

吉池：『漢語方音字彙（第二版）』による限りということなのですが、喻母四等以外の“牙喉音”や“唇音・舌頭音”に [s-] や [ts-] や [z-] は見られないので、これを偶然の現象として見過ごすわけにはいかず、[s-] や [ts-] や [z-] がなぜ現れるのか、何らかの説明が必要です。

中村：喻母四等については、Coblin(1983:244)<sup>13</sup>は、サンスクリット jambudvīpa に対する後漢のパーティア人安世高の音訳語「閻浮利」を挙げ、後漢時代の閻の字音を/\*zjam/とします。また、サンスクリット campaka に対する後漢のソグド人康孟詳の音訳語「閻逼」を挙げ、これによっても後漢時代の閻の字音を/\*zjam/とします。この/\*zjam/の/z/ですが、喻母四等の閻が [ziam] のように、出だしに有声の摩擦音を持っていたため、その有声摩擦音を利用してサンスクリットの/dʒ/や/ɟ/の音訳に当てたと考えて再構した後漢音でしょう<sup>14</sup>。閩語にみられる喻母四等の [s-] や [ts-] は、喻母四等字の摩擦成分の反映と説明することもできます。

次に閩語の来母はどうでしょうか。

### 閩語の来母

吉池：閩北方言を中心として来母に [s-] や [ʃ-] が表れることについては長い研究の歴史があります。次の例は閩北方言に属する建甌のもので [s-] が表れます。[s-] の音節には声調の別を付します。

- ・籬 [lɔ] 文 [sue] 陰去 白 ※
- ・螺 [lɔ] 文 [so] 陰去 白 ※
- ・狸 [li] 文 [sɛ] 陰去 白
- ・李 [li] 文 [sɛ] 陽去 白 ※

<sup>13</sup> Coblin, W. S.(1983), *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*. The Chinese University Press.

<sup>14</sup> 注 23 参照のこと。

- ・笠 [li] 文 [sɛ] 陽去 白 ※
- ・力 [li] 文 [sɛ] 陽去 白
- ・露 [lu] 文 [su] 陽去 白
- ・籃 [lan] 文 [san] 陰去 白
- ・卵 [luŋ] 文 [soŋ] 陽去 白 ※
- ・鱗 [leŋ] 文 [saiŋ] 陰去 白
- ・郎 [lon] 文 [soŋ] 陰去 白
- ・聾 [lon] 文 [soŋ] 陰去 白 ※

陰去は籬 [suɛ]、螺 [so]、狸 [sɛ]、籃 [san]、鱗 [saiŋ]、郎 [soŋ]、聾 [soŋ]。陽去は李 [sɛ]、笠 [sɛ]、力 [sɛ]、露 [su]、卵 [soŋ] となります。

中村：つまり、建甌方言で来母が [s-] で表れる場合に陰調のものと陽調のものがある訳ですね。しかし、この資料から陰陽の別を合理的に説明するのは難しそうです。

吉池：ジェリー・ノーマン (Jerry Lee Norman、羅傑瑞) 氏は、閩語の来母は有声の \*l と無声の \*lh にさかのぼるとします。その根拠の一つとして、邵武 (s-として)、和平 (s-として)、高塘 (f-として) に見られる 8 例が全て陰調として現れることを挙げます。その 8 例は、上に挙げた建甌の 12 字のうち※を付した 6 字 (籬、螺、李、笠、卵、聾) 及び「{イ連}」と「六」の 2 字です。さらに、ミャオ・ヤオ語やカム・タイ語との比較により [s-] や [f-] と表れる来母は無声の \*lh にさかのぼるとします<sup>15</sup>。

<sup>15</sup> 羅傑瑞(2005)「閩方言中的来母字和早期漢語」『民族語文』2005(4):1-5。閩祖語 (“共同閩語”) に \*l と \*lh の二種を立て、前者が [l-] と現れ、後者は [s-] と現れるとする。さらにミャオ・ヤオ語やカム・タイ語との比較により、\*l はミャオ・ヤオ祖語 (“原始苗謡語”) やカム・タイ祖語 (“原始侗台語”) の gl- など (ŋgl-, ŋglj-, pɰl-, mbdzɿ-, mbl-, gr-, gl-) の二重子音に対応し、\*lh はミャオ・ヤオ祖語やカム・タイ祖語の kl- など (klw-, lj-, kl-, tl-, xr-) の二重子音に対応するという。閩祖語とミャオ・ヤオ祖語やカム・タイ祖語との関係であるが、“早期漢語”からの借用語とする。借用語であるのか同系統の言語としての同源語であるのか、仮に借用語であるとして、どちらからどちらに借用されたのか、それを明らかにするのは容易ではない。また、祖語の再構成の一例を見てみたい。ミャオ・ヤオ祖語 (“原始苗謡語”) の「梨」に \*ŋgl- を再建するが、その再建にあたり苗語の養蒿 ya<sup>2</sup>、文界 ji<sup>2</sup>。謡語の江底 lai<sup>2</sup>、羅香 gei<sup>2</sup>、大坪 dzai<sup>2</sup> を利用するわけであるが、材料から再建形を帰納するのに困難を覚えるのは私だけではないであろう。もっとも、羅傑瑞(2005)で提示された対応表を見る限り、[s-] と現れる「籬、螺、李、笠、六」にミャオ・ヤオ祖語やカム・タイ祖語の「無声破裂音+l,r」が対応し、[l-] と現れる「梨、利、鯉、藍、懶、辣、鹿」にミャオ・ヤオ祖語やカム・タイ祖語の「有声破裂音+l,r」が対応するようになっている。

中村：閩語において [s-] と表れる来母は、ある方言では陰陽に分かれ、別の方言ではすべて陰調になる訳ですね。ジェリー・ノーマン氏は後者の資料を重く見たということなのでしょうが、その説に従うと、来母の白話音 [s-] はすべて無声\*lh にさかのぼり、文語音の [l-] はすべて有聲の\*l にさかのぼることになるのでしょうか。

吉池：「文語音の [l-] はすべて有聲の\*l にさかのぼる」とすると誤解が生じるかもしれません。わたしの理解では、文白の異読の有無にかかわらず、[s-] や [f-] 以外の [l-] は有聲の\*l にさかのぼり、それ以外の少数ではありますが [s-] や [f-] で現れるものは無声の\*lh にさかのぼるということです。文白異読があるばあい、たとえば、聾について [lɔŋ] 文と [sɔŋ] 白があるばあい、文語音の [lɔŋ] は後の時代に周辺の言語から取り入れた音ですから、閩語の有聲の\*l にさかのぼる [l-] を取り入れたかもしれないし、閩語以外の [l-] を取り入れたかもしれないので、一括してコレコレと定めることはできないのではないのでしょうか。

もっとも平田昌司(1988)<sup>16</sup>は、来母の s 化に伴う声調を、陰調とするのは不正確であり、むしろ陽調であるもののほうが多いとします。この点は秋谷裕幸(2011)<sup>17</sup>も同様で、[s-] や [f-] の大半は陽調と判断することができるようです。秋谷氏によると [s-] や [f-] の中に陰調であられるものが一部あり、[l-] の中にも陰調で現れるものが一部あるとのことです。

### 来母の来源

中村：いずれにしても、閩語の一部に現れる来母の [s-] などの摩擦音が中古音を反映しているとは見做し難いわけですから、何らかの形で中古以前の音の反映ということになるのでしょうか。来母に摩擦の要素という漢語の周辺にはチベット語の [ɬ] (ジェリー・ノーマン氏が想定した無声の\*lh のようなもの) の他にモンゴル語ハルハ方言の有聲摩擦をとまなう [ɣ] などがありますね。

---

<sup>16</sup> 平田昌司(1988)「漢語閩北方言の来母 S 化現象」『漢語史の諸問題』尾崎雄二郎、平田昌司編、京都大学人文科学研究所、305-328 頁。来母の s 化に伴う声調を陰調とする諸論について次のようにある。「しかし実際には、この言い方はたいへん不正確なものである。まず邵武の陰入(入聲)とは、陳章太 1983 にまとめられているとおり、本来の陰入にその他各聲調の一部分が全く不規則に合流した混合調類、詳しくは附論「喉頭緊張による語派生法の假説」で述べるとおり文白異讀と變音とのあいまじりあったものらしく思われ、単純な陰調とはみなしえない。また建甌の陰去は、平田 1986b で論じたように、いわゆる“陽平甲”と陰去とが合流したのちのすがたであり (pp.9-10)、来母 s 化するものについては『建州八音』に據って“陽平甲”としてとらえるべきである。以上を陰調の例からはずし、さらに「卵」がしばしばタブー語を表す事実を視野に入れると、むしろ陽調であるにもかかわらず来母 s 化が見られるものが多いとさえ言っているのである。」(310-311 頁)。

<sup>17</sup> 秋谷裕幸(2011)「閩語中“来母 S 声”的来源」『語言学論叢』43:114-128、北京：商務印書館。

吉池：漢語のすぐ近くにそのような音があることは注目すべきです。周代以前のことはよく分かりませんが、わたしは漢代の音としては、来母は一種類であり、摩擦を伴った [k-] ではないかと考えているのですがいかがでしょう。

中村：つまり、有声の摩擦音 [ɣ] を伴った [l-] ということですね。

吉池：[k-] という字音を聞き、閩北一帯の人たちは、直ちに [ɣ-] もしくは [f-] もしくは [s-] として受け入れたと想定すると、来母字が閩北一帯で摩擦音として現れることを説明できます。もっとも秋谷裕幸(2011)のように [s-] は [f-] にさかのぼり、更には [ɣ-] にさかのぼるといふ音韻変化としてとらえてもいいのでしょうか<sup>18</sup>。

中村：閩北一帯の人たちが [k-] に接した時期はいつごろでしょうか。

吉池：これは李如龍(1983)<sup>19</sup>の受け売りなのですが、李氏は、『晋書・地理史』の記述により、三国呉の永安三年（後 260 年）に福建に初めて建安郡（閩西北地区）を置いて 7 県 4,300 戸を治めたとし<sup>20</sup>、これを漢人が閩を開発した最も早いものとします。また、『宋書・州郡志』の次の記述、建安郡はもと閩越であり、秦は閩中郡を設けたが、漢の武帝の治世のときに反乱をおこしたため、これを滅ぼし、その民を江淮の間に移した。そのため、この地は廢墟となったが、その後、山谷に逃れたものによって県がつくられ、会稽に属したという記述により<sup>21</sup>、漢以前、この地の主要な住民は閩越人であり、後に漢人が入植し閩越人と雑居

<sup>18</sup> 秋谷氏は [ɣ-] の前段階を \*r とし、その音質を接近音の [l-] とする。その根拠は、①閩北方言や閩中方言で [s-] や [f-] と現れる来母字があり、②その同じ来母字が閩南方言や閩東方言では [l-] となるという二点にあるようだ。この [s-] [f-] [l-] を説明し得る共通の祖語として \*r [l-] を想定し、\*r → ɣ → f → s と変化したとする。なお、[s-] [f-] のなかに陰調であられるものが 3 字あり、これを無声の \*r̥ にさかのぼるとする。また [l-] のなかに陰調であられるものが 2 字あり、これを無声の \*l̥ にさかのぼるとする。

閩祖語として次の四種を想定する。

|    |     |                       |     |                       |
|----|-----|-----------------------|-----|-----------------------|
| 有声 | *r  | 螺老笠                   | *l  | 来辣                    |
| 無声 | *r̥ | 露瀨 <small>□尋找</small> | *l̥ | 利 <small>利益□孫</small> |

<sup>19</sup> 李如龍(1983)「閩西北方言“来”母字讀 s-的研究」『中国語文』1983(4):264-271。

<sup>20</sup> 『晋書』卷 17「地理下」に「建安郡 故秦閩中郡，漢高帝五年以立閩越王。及武帝滅之，徙其人，名為東冶，又更名東城。後漢改為侯官都尉，及吳置建安郡。統縣七，戶四千三百。建安 吳興 東平 建陽 將樂 邵武 延平」とある。『三国志』「呉志」卷 3「孫休」には「(永安) 三年春三月，……以會稽南部爲建安郡，分宜都置建平郡。」とあり、建安郡を置いた年が永安三年であることがわかる。

<sup>21</sup> 『宋書』卷 36「志第 26」「州郡 2」に「建安太守，本閩越，秦立爲閩中郡。漢武帝世，閩越反，滅之，徙其民於江、淮間，虛其地。後有遁逃山谷者頗出，立爲冶縣，屬會稽。」とある。

状態となり、言葉の面でも互いに影響し合ったとします。

中村：李氏の記述によるならば、概略ということですが、漢代前後には閩北一帯の人たちは [k-] に接したということになりますね。漢代前後のある時期に、漢語の来母 [k-] に接したとして、それをどのように受け入れたのでしょうか。閩南や閩東の人たちは [l-] で受け入れたとしていいのでしょうか、閩北や閩中の人たちはどうでしょうか。

吉池：おそらく閩北や閩中の人たちは [k-] を聞いて、その全てを [ɣ-] もしくは [f-] もしくは [s-] で受け入れたのでしょうか。その後、周辺言語の [l-] を文語音として受け入れた結果、口語音の [ɣ-] [f-] [s-] は徐々に [l-] に取って変わられ、一部にのみ文語音 [l-]、口語音 [f-] [s-] という文語と口語の異読が過去の痕跡として残ったというわけです。もっとも、文語音と口語音の両者がそろっているわけではなく、[f-] [s-] のみという場合もあるのでしょうか。

中村：いずれにしても、来母が漢代において [k-] であったならば、中古音の来母 [l-] への変化を無理なく説明できます。ところで、東アジアの言語をみると、モンゴル語のハルハ方言に [k-] がありますが、隣接したチャハル方言は [l-] です。言語は異なりますが、隣接した方言において /l/ の音質が [k-] と [l-] という異なりを見せるという点で参考になります。漢代の来母の音価として [k-] を受け入れるとして、ちょうどハルハ方言 [k-] とチャハル方言 [l-] の相違のように、漢代の保守的な方言である長安一帯は [k-] で、革新的な方言である洛陽一帯は [l-] であった、ということも考えてよいかも知れません。

長安一帯 [k-]

ハルハ方言 [k-]

洛陽一帯 [l-]

チャハル方言 [l-]

吉池：そうですね。長安一帯 [k-] もその後は [l-] となり、北方の漢語音は総体として [l-] となったと想定するわけですが、そのような漢語の [l-] と接触したチャハル方言が、漢語との接触の影響で [k-] から [l-] に変化したと考えれば、現在のモンゴル語の状況も理解しやすくなります。

#### 漢代の喻母四等と来母の音価

中村：ここまでのところをまとめると、漢代の喻母四等が \*d- [d-] (カ氏) もしくは [d̥] (藤堂氏) で、弋は \*d̥iak [d̥iak] (カ氏) もしくは [d̥iak] (藤堂氏) であった。漢代の来母は有声の摩擦音をともなった [k-] であり、歴は [k̥iek] のような音であったということになります。

吉池：「Alexandreia」の音訳にあたり、歴 [k̥iek] など来母は摩擦の聞こえが強く /lek/ の /l/

にふさわしくなかった。そこで近似音として喻母四等の弋(カ氏[djək]もしくは藤堂氏[diək])を利用したということでしょう。

中村：漢代の来母 [k̚] はおそらく洛陽音の影響で [l] へと変わり、中古音へとつながります。

吉池：[d-] もしくは [d̥] を /lek/ の /l/ に当てることができるかという問題ですが、『漢語方音字彙 (第二版)』によると、厦門方言の [l] は破裂がやや強く [d-] のように聞こえとあります<sup>22</sup>。原音の「Alexandreia」の [l] が破裂の強いものであったか、あるいは漢語の側で喻母四等の [d] の破裂が弱かったか、もしくはその両方であったか、そのような状況下では [l] に弋をあてることも不自然ではないと言えるのではないのでしょうか。

中村：ところで、「離」が摩擦の [k̚] だとして、どうして「Alexandreia」の「l」でなく「r」に対応させたのでしょうか。

吉池：音訳「烏弋山離」が基づいた原音で「r」がどのような音であったか想像するしかありません。/r/には弾き音、ふるえ音、摩擦の強いもの弱いものなど、様々に想定することができますが、比較的摩擦の聞こえの大きい/r/であり [k̚] を当てても違和感はなかったということでしょう。

#### 前漢における喻母四等と来母の方言差

中村：ところで、喻母四等と来母の音価について、前漢と後漢、長安と洛陽の違いを少し整理してみませんか。

吉池：中村さん、何かアイデアはおもちでしょうか。種々の音訳語が無理なく説明できればいいのですが。

中村：前回の「烏」の場合の例を参考にして次のように想定してはいかがでしょうか。表中の→は、遷都によって、字音の主流が交代したことを示します。なお、喻母四等の [d-] はカールグレン氏の軟音 (lenis) の [d-] ですが、これを藤堂明保氏の [d̥] に置き換えも可能です。また、洛陽一帯の来母の摩擦は長安一帯よりも少ないものであったと想定します。

「アレクサンドレイア (Alexandreia)」の音訳「烏弋山離」の弋 [djək] は、前漢長安一帯の字音によったもの。「ソグド (Soghdō など)」の音訳「粟弋」の弋 [djək] は、後漢長安一帯の字音によったもの。サンスクリット jambudvīpa に対するパルティア人安世高の音

---

<sup>22</sup> 「声母 l 發音時舌邊氣流較弱, 除阻時舌尖部位破裂稍強, 聽感上與塞音 d 相近。」(35 頁)。



訳語「閻浮利」および *campaka* に対するソグド人康孟詳の音訳語「閻逼」の閻 [ziam]<sup>23</sup>は、後漢の洛陽一帯の喩母四等の字音によったものということです。

|             | 前漢                       | 後漢                   |
|-------------|--------------------------|----------------------|
| 長安一帯<br>保守的 | 喩母四等 [d-]<br>来母 [ɣ-]     | 喩母四等 [d-]<br>来母 [ɣ-] |
| 洛陽一帯<br>革新的 | 喩母四等 ([z-])<br>来母 ([l-]) | 喩母四等 [z-]<br>来母 [l-] |

### 『那先比丘経』の阿荔散

吉池：やや話は飛びますが、グレコ・バクトリアのミリンダ（メナンドロス）王とインド僧ナーガセーナの対話がパーリ語で伝わっており、その日本語訳『ミリンダ王の問い』があります<sup>24</sup>。その解説によると東晋時代（317-420年）の漢訳『那先比丘経』（『大正新修大藏経』第32巻）があり、ミリンダ王の出生地アレクサンドレイア（Alexandria）を「阿荔散」と音訳するとのこと。

中村：漢訳『那先比丘経』の原本が明確ではなく<sup>25</sup>、アレクサンドレイア（Alexandria）の音形がどのように原本に伝わっていたか定かではありませんが、荔は来母字でありカ氏中古音で *liei* ですから、この字で /lek/ に相当する音を訳したことは認めてよいでしょう。

吉池：漢代長安一帯の来母字 [ɣ-] は、東晋時代には [l-] となっていたことでしょう。そ

<sup>23</sup> jambudvīpa の j/dʒ/ や *campaka* の c/ɣ/ の音訳に使用される閻の字音に、摩擦音 [z-] を想定することについてはなお検討の余地がある。また、『後漢書・西域伝』に「閻膏珍」として登場するクシャン朝第三代の王 Vima Kadphises (AD 120-143) の Vima は、ギリシア文字・バクトリア語およびギリシア文字ギリシア語で「OOHMO (ooēmo)」と表記され、カローシュティー文字・ガンダーラ語で「vima」又は「vema」と表記される。この表記が示す音 [we:mo] [wima] [wema] の音訳に閻が使用されるわけであるが、その閻の字音に摩擦音 [z-] を想定するのはややためらわれる。検討すべきことは少なくないが、ここでは Coblin(1983)にしたがって暫定的に /\*z/ [z-] としておく。

<sup>24</sup> 中村元・早島鏡正(1963)『ミリンダ王の問い(1)』[全3巻]平凡社。1994年第27刷による。

<sup>25</sup> 「漢訳『那先比丘経』の原本が何語で書かれていたかという、恐らくサンスクリット語または混淆サンスクリット語とよばれるものであって、パーリ語ではなかったであろうと思われる。」(312頁)。

のような来母字の [l-] で、/lek/の/l/に相当する音を訳すことに無理はありません。もっとも、漢代長安で候補になりえた喻母四等は、東晋時代にはすでに摩擦音化していたでしょうから、来母字以外に候補はなかったと思われます。

### 朝鮮半島南端の伽耶と伽羅

吉池：先に取り上げた「海格里斯的博客」というブログ興味深い記述があります。喻母四等が l に対応するのは Alexandria の音訳語烏弋山離以外にもあるとのこと。朝鮮半島南部の民族の伽耶は後に伽羅 kala と表記されることから、喻母四等の耶に上古音の \*l- を認めるといえるものです<sup>26</sup>。

中村：これまでの議論によるならば、後漢の長安一帯の音では羅などの来母は摩擦の強い [k̚] であったため、kala の la はふさわしくないと判断し、喻母四等の軟音の [d-] をもつ耶を近似音として利用したということになります。後に耶の声母は摩擦音化し中古音では [j-] となり、来母も摩擦音が取れて [l-] となったため、喻母四等の耶を来母の羅に置き換えて伽耶を伽羅としたということになります。

吉池：伽耶は、洛陽一帯の音ではなく長安一帯の音に拠った音訳ということですね。

### 長安音と洛陽音

中村：ところで、「Alexandreia」の「lex」の音訳にあたり、候補として自然におもえる来母の歴を使用せずに喻母四等の弋を使用したのはなぜかという白鳥氏の発問は、単純でありながら本質を鋭く突くものでした。それに対してわれわれは次のように想定しました。漢代当時の長安では来母の歴は [k̚iek] のように摩擦の聞こえが強く /lek/ の /l/ にふさわしくな

---

<sup>26</sup> 「聂鸿音先生の《番汉对音和上古汉语》中对时下热门的番汉对音研究中存在的问题提出中肯的批评，这个批评深得我心。目前有些学者在解释古代番汉语音资料时显得随心所欲，而一些门外汉那里用的简直是惨不忍睹。聂先生强调“音理分析只能用来解释带规律性的、确实无误的文献资料，使人们明白它们之间的因果关系，而不能在没有文献资料或者不能确定资料性质的情况下用来虚拟事实。”本文正准备以君之矛，攻君之盾，对聂先生的对“以母为 \*l-” 的不同意见提出不同意见。

上古汉语以母为 \*l- 的一个重要证据是《后汉书·西域传》中的乌弋山离对应于中亚名城 Alexandria，以母字弋对应于 Alexandria 的第二个音节。聂先生以为这是个孤例，实际上，上古汉语以母对应外来 l- 的还有一个伽耶，这是中古早期韩半岛南部的民族，后来的史书上又称为加罗，对应于日韩史书上的 kala。中古早期以母早已变成 \*j-，这里很可能是当地吸收的汉语读音中保留的上古音，如同现代日语韩语中还保留有汉语的中古音一样。后退一步，也可以证明汉语史上确实有用以母翻译外来的 l- 的。」

かったので、近似音として喻母四等の弋（カ氏\**djak* [djak] もしくは藤堂氏 [djak]）を利用した。

そこで方向を変えて、おなじ質問をしてみたいと思います。「ソグド」の原音を *suguda*、*soghdo*、*sogd* に類するものであったとして、/da、do、d/の音訳にあたり、候補として自然に思える定母の字（カ氏は上古音\**d*<sup>h</sup>- [d<sup>h</sup>-]、中古音 *d*<sup>h</sup>- [d<sup>h</sup>-] とする）を使用せず、喻母四等の字（カ氏は上古音\**d*- [d-]、中古音 *j*- [j-] とする）を使用したのはなぜでしょう。

吉池：カールグレン氏が上古音に想定したように、漢代において定母は息を伴った硬音の [d<sup>h</sup>-] であったとすればいいのではないのでしょうか。定母は息が強く摩擦の騒音を伴っていたため、「ソグド」の/d/にふさわしくなかった。そのため、閉鎖の弱い軟音の [d-] をもつ喻母四等の弋や繇を使用したということになります。

中村：現代呉方言の有声破裂音の語頭に位置にみられる有声の息 (h) は、どちらかという軟音に伴う息ですが、漢代の定母の息は強い摩擦騒音を伴う硬音の息と考えるわけですね。同じ息でも両者は異なる。

吉池：そう、異なりますね。音訳語「烏弋山離」とおして、これまで3回の話し合いをしました。このあたりで一度話し合ったことをまとめてみませんか。とくに漢代の長安と洛陽の音という観点からまとめるとどうなるでしょう。

中村：前漢の洛陽一帯の状況はよくわかりませんが、後漢と大きな違いを想定する材料は持ち合わせていないので、ほぼ同様であったと考えると、下の表のようになるのでしょうか。

吉池：洛陽一帯の音が、後の中古音につながるように見えますね。

中村：長安一帯の音は息や摩擦を伴った“ゴツゴツ”した音であり、洛陽一帯の音は“ノッペラ”とした音ですね。このうち、洛陽一帯の音がしだいに有力となり、長安一帯の音もしだいに洛陽化し、中古音につながっていくということでしょう。なお、Schuessler(2009)も後漢音に二つの層を想定します。もっとも、後漢音の口語 (“in some LHan speech”) に古い音が反映していると述べているので、地域差とは考えていないようですが<sup>27</sup>。

---

<sup>27</sup> “Later Han Chinese(LHan, LH) represents an older strain of the language of the Eastern Han period from perhaps the 1st century AD. It includes features of Middle Han Chinese(MHan), which must have been present in some LHan speech because they survive in the modern Mǐn dialects as well as in the language of Later Han period writers from Shandong.”(p.29)

|             | 前漢  | 後漢  |
|-------------|---|---|
| 長安一帯<br>保守的 | 模韻 [a]<br>喻母四等 [d-]<br>来母 [k-]<br>定母 [d <sup>h</sup> -] | 模韻 [a]<br>喻母四等 [d-]<br>来母 [k-]<br>定母 [d <sup>h</sup> -] |
| 洛陽一帯<br>革新的 | 模韻 [ɔ]<br>喻母四等 [z-]<br>来母 [l-]<br>定母 [d-]               | 模韻 [ɔ]<br>喻母四等 [z-]<br>来母 [l-]<br>定母 [d-]               |

※表中の→は、遷都によって、字音の主流が交代したことを示す

※長安一帯の [d-] は軟音、[d<sup>h</sup>-] は硬音

### 最近の研究

中村：ところで、しばしば「新派」と呼ばれることのある最近の研究についても目を向けておく必要があろうかと思えます。

吉池：チベット語やタイ語の音形を積極的に参照しつつ漢語上古音の研究を行おうとするグループですね。シナ・チベット語族というものを認めるかどうかは研究者によって様々なようですが、中古音や現代諸方言に見られない音を多く再構するという点でカールグレン以来の伝統的な手法とは一線を画していると言ってよいでしょう。

中村：ただし、最近の研究は高度に理論的で、なかなか他分野の研究者が付いていけないような状況です。例えば、Baxter&Sagar(2014)<sup>28</sup>による「寺」の再構音は\*s-[d]əʔ-s ですが、実際にどのように発音するのか迷ってしまいます。もっともこれはまだマシな方で、抽象的な記号が連続していてとても“再構音”とは呼び難いものがめじろ押しという状態です。その中で、Schuessler(2009)<sup>29</sup>は現在進行形で研究が進んでいる理論的な部分を切り捨てた、最大公約数的な上古音を提示していて、門外漢には非常に取っ付きやすいものです。まずはこの書によって最近の研究を確認することにしてはどうでしょうか。

吉池：Schuessler(2009)によって喻母四等の「弋」と定母の「代」と来母の「離」の上古音と

<sup>28</sup> Baxter, William H. and Laurent, Sagart (2014), *Old Chinese: New reconstruction*. New York: Oxford University Press.

<sup>29</sup> Schuessler, Axel (2009), *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese*. Honolulu: University of Hawaii Press.

後漢音をみるとつぎのようにあります。なお、前漢音についての体系的な記述はありません。ここまでにわれわれが推定した漢代の音とは異なる部分があります。上古音が前漢まで、どの程度維持されていたのかわかりませんが、喻母四等の弋を [l-] とし、来母の離を [r-] とするところが大きく異なるようです。

|          | 上古音  | 後漢音  | 中古音  |
|----------|------|------|------|
| 弋 (喻母四等) | lək  | jik  | jiək |
| 代 (定母)   | ləkʰ | də   | dəi  |
| 離 (来母)   | rai  | liai | lje  |

中村：Schuessler(2009)によると、上古音の [l-] は、後に喻母四等 [j-] や定母 [d-] になるわけですが、喻母四等については閉鎖の弱い [ɖ-] を経過して、中古音で [j-] となったとしてもそれほど無理な変化ではありません。ただ、上古音の [l-] が中古音で [d-] となるものかどうか、スンナリと腑に落ちません。上古音の [r-] ほうは、摩擦成分を伴ったものであるとすると、それが摩擦のある [ɣ-] となり、中古音で [l-] となったとしても、これもそれほど無理な変化ではありません。

吉池：漢代音という範囲に限るならば、Schuessler(2009)の上古音を仮に受け入れたとしても、我々の推定との間に、乗り越えられない矛盾はないということですね。

中村：そういうことです。わたし自身は最近の上古音研究にはかなりの違和感をもっていますが、漢代音に限ればあまりこだわる必要はないかも知れません。問題は代など中古で定母となる字の上古音ですね。上古音の喻母四等に [l-] を想定する限り、それと諧声系列をなす代なども、[d-] などの系統ではなく、[l-] を想定したほうが、諧声系列という面では自然です。しかし、何度も言いますが、上古の [l-] から中古の [d-] への変化にやや無理があるように思います。別個の音韻である /l/ [l] と /d/ [d] が理由もなく合流するということがあり得るでしょうか。

吉池：そうですね。カールグレン氏や藤堂氏のように、上古音の喻母四等に [d-] や [ɖ-] を想定してどのような不都合があるのでしょうか。我々は、漢代音の一部を想定するに際して、現代方言や諧声系列、わずかではありますが前漢以降の対音資料に拠ったわけですが、そもそも最近の上古音研究における喻母四等の [l-] や来母の [r-] は何によりどのように設定されたのでしょうか。

中村：その辺も一度踏み込む必要がありますが、相当に複雑な話になるので、また機会を改めてということにしましょう。